

# 白選五十首

童貞のするどき指に房もげば葡萄のみどりしたたるばかり

ヴェニスに死すと十指つめたく展きをり水煙りする雨の夜明けは

火の剣のごとき夕陽に跳躍の青年一瞬血ぬられて飛ぶ

いらいらとふる雪かぶり白髪となれば久遠に子を生むなかれ

火祭りの輪を抜けたる青年は霊を吐きしか死顔をもてり

水脈<sup>み</sup>ひきて走る白帆や今のいまわが肉体を陽がすべりゐる

わが歓喜告ぐべきひとと帆を繰りし日は暮れ初めつ青潮のうへ

淋しさに気ぐるふ夕べ水檜に降るとしもなき雨を聴きをり

水檜の雫になぐさみ死なずをれば若さの漏泄ほしいまなる

獅子座つめたき夜天にふさふ友なれば宇宙のはてにて死なむか孤り

「未青年」

「夢の法則」

「行け帰ることなく」



春日井 建

私はこれまでも時折、作品を自選してきた。その都度、選ぶものは同じではない。選をする折々の気分の反映で抄出したい歌が違ってくる。今度の場合でいえば、『友の書』のころから私の作品に登場するアフガンの友人の歌を常よりも多く採った。「君はハザラ人に似ている」と言われた日から心の奥にあったアフガンのアジア人、ハザラにふいに出会ったのは昨年のこと。山岳地に棲むやさしい民族と聞いていた人が、北部同盟の兵士として銃をもってテレビ画面に現われた。悲しみという軍隊に張りあうな、という古詩が蘇った。

私はいつも感じているのだが、歌は新しく作ったものほど気に入っている。どの歌集からも採ろうと意図したのでこのような

宇宙服ぬぎてゆくととき飛行士の胸にはるけき独唱<sup>ソリア</sup>は澄めり

潮あかり顫へてとどく岩に寝て燕の誇りをわが誇りとす

青海原に浮寝をすれど危ふからず燕よわれらかたみに若し

雲の峯猛りはじめし沖へむけてわれの燕は翔びたち行けり

返すべき礼ともことば生るる秋絶えて会ふことなけれど父よ

語るなく逝き給ひしは黎明と呼ぶしろたへの時到的まへ

卓上に寒気あつめて一盞と酢牡蛎置かれてある夕まぐれ

わが生れし日の夕まぐれやすらへと言ふのみ齢かさねし母に

青葦の莖をうつせる水明り風過ぐるときましかがよふ

誰か聴くわが聴かずして素裸の友の夜明けの呼吸ととのふ

一瞬を捨つれば生涯を捨つること易からむ風に鳴る夜の河

一步一步空の梯子をのぼりゆく墜ちなむ距離を抜けむとして

みづうみのみづを見むとし突堤にいできてまどふ羅<sup>うすもの</sup>の霧

わが前の視野のかぎりの水の蔵ことばを収めただ鎮もれり

冷え徹る巖頭の鶴のひそけきに身の力はも充ちてゐるべし

冬来たり冷えつのれども藍甕の藍はしづけく息づきやまぬ

藍の気をなだめむとして滴らす酒はつめたき香りを撒けり

水素雲ひろぐる星の速やかに息づきて魂の涼しむ秋か

遠ざかりまた巡りくる友誼とも走りきたらむ彗星の核

鏡をば虚無の中樞に射し入れて星を得たりしエドモンド・ハレー

### 「青葦」

結果になったのだが、気持ちに逆らわなければ新しい作品順に並べてしまいかもしれない。第七歌集『白雨』以降の歌ももう随分ある。しかし今回は、歌集に収めたものだけにした。表現者にとって、以前に書いたものより現在作っているもののほうに興味があるのは、思えば当然のことではないだろうか。創作意欲の源は、今の自分の意になつたものを作りたいという欲望にあるのだから。新作ほどその欲望を満たしていることになる。

最近の私には、病の歌が加わつた。身体状況を報告するわけではない。それを通して命とか存在とかいったものが見える気がしているからである。『白雨』に抄出した二、三の病に関わる歌は友人を対象としたもの。彼の病を通して私が体験したファン・トム・ペイン（実在しない幻の痛み）が、今自分の痛みに通じている。

もう一つ、私には主題をもつ連作がかなりある。これは初期のころから意識した方法で、作者としては一連として読んでほしいものだ。そうした作品は一篇として気に入っていても一首として抄出しなかつた。書けないものなどない、という檄<sup>げい</sup>がどこからか聞こえてくる。

（かすがい・けん「短歌」主宰）

今に今を重ねるほかの生を知らず今わが視野の潮うしほしろがね

「友の書」

あらかじめ時の流れはこの島に失はれるて青潮の寄る

白波が奔馬のごとく駈けくるをわれに御すべき力生まれよ

わが友はペルシヤ人千年の時かけて高地に吹ける風をまとふも

「悲しみといふ軍隊に張りあふな」ペルシヤの古詩の今に寒きを

友に神ありわれに神なきあけくれに石榴はひらく朱の古代花

アフガニスタンの留学生とわが孤独かたみに均りあふ春と思へり

季の王を春と定めし古代詩のゆたかさや汝の若さを愛す

「欲ふ」と記し「思ふ」と読ます一行の身にしみて春は巡る幾たび

月の光受けてきらめきるたりけり可視なる精神のごとき粗塩

鳴のゐる春の水際へ風にさへつまづく母をともなひて行く

「白雨」

九十を越したる母を祝ふとて用意せしアフロディテ種の白花

泣きしのち少しうつけてこの朝寒母は逆縁を受け入れむとす

またの日といふはあらずもきさらぎは塩ふるほどの光を撒きて

病名は患者みづからに告げられき水のごとかりしかの夕つ辺に

免疫力弱りてあれば遠ざけよ雪虫を先だてて来たる寒気を

ペルシヤ人の友ありきかつて高地人ハザーラにわれを似ると言ひにき

ハザーラ人にわれは似るといふ天に近き高地にて風を追ひゐる民に

味爽は青味を帯びて来たるべしヒンドウ・クシユの山々の辺に

朔の月の織きひかりが届けくる書けざるものなどなしといふ櫛